

# 船団

● 第100号 特集Ⅱ 再びひとり旅

# 会員作品



坪内稔典

おでん屋のおでんの文字の太々と  
大根に根気があるぞおでん鍋  
こたつから見ている丸いだけの山  
手袋の親指だって強情だ  
頭からまっさきにとけ雪達磨  
大空に雲の一片クリスマス  
窓に雪ふるさとの雪新年会

鶴濱 節子

古代まで行つて来たのか秋の蝶  
秋霖やゆつくりと飲むハーブティ  
逆立ちの少年といふちちろ虫  
柿日和爪研ぐ猫とわたくしと  
二丁目のカラスが来てるハロウィーン  
背伸びする大菩薩嶺の霜柱  
徒然に小春の海を抱いてみる

寺田 良治

まだ青いこのかまきりはアルカリ性  
性格はぶつきらぼうで青大根  
聖書読むぶどうの粒を噛むように  
未解決事件のその後カンナ咲く  
折れたのはガラスの涙線小鳥来る  
こおろぎはときどき鉄橋ときどき夕日  
ふと秋の輪ゴムのように跳ぶ雀

田 彰子

今朝の秋荷物がひとつふえている  
椋鳥の中心にある裁判所  
整列の埴輪手を上げ運動会  
饒舌な男の横に水澄みぬ  
アイライン目からはずれて文化の日  
ウオッカの余白にさくつと冬の雨  
足冷えて君は多弁になっていく

中原 幸子

菜の花の 大空にあり熱気球  
橋の下に木の椅子のある晩夏かな  
二百十日水に浮く箸沈む箸  
子規の忌の天まで伸びる避雷針  
手術美とワードが書いている良夜  
桐一葉梢に残りいたりけり  
冬夕焼あめ玉に種なかりけり

中村あいこ

天の川さそりはしつぽ絡ませて  
草の花風雨の中のコンサート  
UFOと若冲が来て秋が来て  
バツタ跳ぶ高機能付体重計  
つれ合いは後期高齢衣被  
ちんちろりんあなたの顔は醤油顔  
秋の夜の生命線を見くらべて

梨地ことこ

東 英幸

秋の空クレーンゆるゆる王者たり  
柿たわわ安藤忠雄の教会の  
刈田道おちているのは白いひも  
黄落を生徒サツサと川べりを  
ユニセツクス梨の香りがいたします  
青い梨熟して吉永小百合かな  
梨をむく虎視眈々と市原悦子

空白の某月某日秋刀魚焼く  
この良夜髪の匂いの幽かなり  
寝待月他人の顔をしていたり  
玄関にいとこの立って秋の風  
首都高速落とし物あり竹婦人  
初冬のミュシャのポスター見て過ぎる  
百歳で女は死んで朝の鵲

南北 佳昭

火箱 ひろ

こりやどうじゃアヌス肛門の開く油照  
で、どうするの横顔に聞く大文字  
糸瓜忌や産婆と下る団子坂  
大仰を喰らう二十世紀を喰らう  
また京都殺人事件秋日傘  
異邦人のパワーランチャや鵲高音  
顔洗う猫は右利き冬に入る

「ひ」は「べ」よりおちやめで「ぼ」より秋です  
ね青虫の青い現在白い過去  
プリクラのピースが遺影りんご剥く  
詩がなんだ俳句がなんだ秋刀魚食え  
菊日和巨乳の祖母の土佐訛り  
ラーメン食う横顔ずらり秋の果  
吊橋をわたる緬羊雪ばんば

陽山 道子

存らえて大根人參サクサクと  
晩秋の絵本のバスがことごとり  
小鳥来る丁寧を書く備忘録  
晩秋の但馬街道歩くべし  
でこぼこのぼこが好きです浮寝鳥  
晩秋の快速電車で揺れてます  
秋の日のどの穴のぞこ鼻唄で

平井奇散人

片言がぶつかりあって春兆す  
列くずすお一人様の花巡り  
菜種梅雨一妻多夫の説を聞く  
秘密から始まるいくさ春北斗  
俺なみに海牛急ぐ春の雨  
シーサーが散歩寄り道日の永さ  
沈丁花朝寝朝風呂朝ワイン

